

むかし、あるところに、びんぼうなお百姓ひやくしやうとよめさんがくらしていました。

あるとき、赤んぼうが生まれましたが、生まれた子は、皮をかぶったへびでした。よめさんは、へびに「みいさん」と名前をつけて、家のうらに放して、たいせつに育てました。

ある年のこと。何日も雨がふらず、日でりがつづき、田んぼも畑もみなかれてしまいました。村の人たちはこまりはてました。

よめさんは、

（そうだ。へびは竜りゅうのお使いだし、あの子に、雨をふらせてくれるようたのんでみよう）
と思いました。そして、うらに出てみいさんをよびました。よめさんが、

「日でりがつづいて、こまってるんだよ。おまえ、三日のうちに雨をふらしてくれないか」とたのむと、みいさんは、だまってうなずきました。

そこで、よめさんは、庄屋しやうやさんのうちへ行って、

「うちのみいさんが三日のうちに雨をふらしてくれますから」といいました。そして、家に帰ると、うらに出て、「雨をふらしておくれ」と、いのりつづけました。けれども、雨はなかなかふってきません。

いよいよ三日目になりました。よめさんが、

「どうか、きょうこそ、雨をふらしておくれ」といったとたん、かみなりが鳴り、ものすごい雨がふってきました。

田畑はうるおい、村じゅう国じゅうが大よろこびです。

おかげでその年は大豊作*だいほうさくになりました。村の人たちは、みいさんのおかげだと、祠*ほこらをたてておまつりしました。

それからのち、よめさんの家はお金持ちになって栄えたさかそうです。

おしまい。

* 大豊作 田畑の作物が、いつもよりたくさんとれること

* 祠 神さまをまつる小さなたてもの